
おい MADぐんしょー

ジェイのすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おい MADぐんしょー

【Nコード】

N6172B

【作者名】

ジェイのすけ

【あらすじ】

マッド軍曹とあだ名される老人は何を隠そう、誰もが涙を流して腹をよじれさせるほどおマヌケな天才マッドサイエンティストなのである。

そんな天才老翁は、妖しくも悲しい過去の繰り返しである。時には破壊に明け暮れ、時には同僚と酒を酌み交わし、時には愛に生きてきたのである。

そして六年前、ひよんな事から身長3メートルの巨大なモヒカン男オゲル君と暮らし始めたのである。彼ら師弟はなぜかとても仲がよ

い。仲が良すぎて、今日もなにやらトンでもない事件が巻き起こり
そんな予感――。さて、彼らの発明とやらはいったい何なのであり
ましょう。

義理人情と個人主義が交錯する古い時代の悪の秘密組織小説。

#1【その マッド軍曹という博士】（前書き）

門松は 冥土の旅の 一里塚
めでたくもあり めでたくもなし

一休宗純

#1【その マッド軍曹という博士】

時は、西暦20XX年。

南国の優しい潮風と、北国の厳しいオロシとがぶつかり合う、丁度都会と田んぼの真ん中へんから森の奥深く入った山岳地帯のその下の、大きな河が流れるずーっとずーっと下流辺りに佇む赤い鉄塔の展望室から、舶来品の双眼鏡でジーツと見つめていると思わずゴックン頭の中に浮かんでくる垂涎ものの手作りお弁当に本能的に舌鼓など打って、瞳のキレイな恋人と「はい、アーン！」とか言っ
て戯れている妄想にウツトリとしてしまいたくなる場所に、御平
家支払町という名の町があった。

そのひどくふざけている町の外れには、ちよっぴりおしゃまで、ちよっぴりセンチな発明好きの博士^{ドクター}が住んでいた。

その博士の名前は、『松戸群莊^{まつどくんそう}』。

彼は、“発明”という二文字に沈溺^{ちんでき}する事半世紀余り。近所の住民達は、そのひねくれた性格ありのままの容貌と、どこか憎めない喋り口調から、彼を敬愛し包み隠さずこう呼んだ。

『おい！ マッド軍曹（ぐんしよ）！！』と。

#2【その オゲル君の発明、博士の憂鬱】

そんなある日、草木も眠る丑三つ時のことである。『マッド軍曹』こと松戸博士は、痩せこけたその身体を落木のようにベッドにあずけ、とがったアイロンの先のような赤い鼻を雷のように響かせて、深い深い眠りに浸っていたのである。

そこにいきなり、

「ドクトール！ ドクトール！ ドクトールぐんしょー。オキテクダサーイ！」

と、冬眠していた熊も飛び起きるほどのドデカイ声。ベニヤ板にカラーコピーで施したロココ調の扉は、瞬く間に倒壊した。そして否応なく加齢臭が漂う抹香臭い寝室は、途端にベニヤ板の木生臭い惨状と化した。

博士は、まだくつついて離れないマブタをこすりこすり。某。イクマの見切り品で買った、ダイナミックなブルーのナイトキャップのぼんぼんが、ユラユラと揺れている。

「もう、なんなのよ……。ボクちゃん今、ものすごいクラゲサラダの夢を見ていたのよ。それを邪魔するなんて、あんた本当にオカチメンコなんだから」

なんともわけの分からない起き抜けの一言である。

「Oh！ ドクトール、寝ている場合じゃアリマセーン！ 完成シマシタ。ツイニ完成シタノデース」

声のデカイ男は、ついでに体も飛び切りでかくて、身長が三メートルとハセンチあった。

しかも大男は芭蕉扇みたいなデッカイ手で、博士のヒョロい肩を揺さぶったのである。

「うががががが……」

これには博士も堪らない。震度7のような揺れで脳天をガクガク。ほっそい首をボキボキ。

「はがががが……ひふう。もうっ！ なにすんのよ、このインチキフランス人！！ ボクちゃん死んでしまうじゃないのよ！！ 大体アンタ、ボクちゃんの名前は“ぐんそう”よ。“ぐんしょ”じゃないんだから！ よく覚えといて！！」

博士はピヨンと飛び上がって、頭からやかんののように湯気を出した。飛び上がった高度はなんと三・六フィート。何ともお若い七十七才である。

しかしこの、博士の眠りを妨げた大男も大そうなものである。人並外れた体格もさることながら、この気構え。

六年前のある日、

「田舎二一晩ダケ、トメテクダサーイ」

なんて言って博士の家を訪ねてきて、ちゃっかり今日まで住み込んでしまった。

しかも観光ビザだけで……。

「それよりコイツ地球人かしら……？」

なんて博士は心配なんか言って見ちゃたりなんかしちゃったりして、パスポートの写真を見てみると、全然顔が違っじゃあーりませんか。

「アンタ、随分とパスポートの写真と顔が違っじゃないの？」

とか言っちゃったりしたものの、何だか恐くてそのまんまになっちゃったのです。

「オゲルちゃん！ あんた今何時なのか分かってんの？ 二時よ夜中の二時！ エキセントリックな良い子はもう寝る時間なんだからあ！」

松戸博士は声が裏返り、少女みたいなツンツン声で大男をなじった。

「Oh！ ぐんしょー！ イタミイリマース！ モットなじってクダサーイ！！」

オゲルは顔を赤らめモジモジした。はつきり言って気味が悪い。いやそれを通り越して恐い。

「あんた何感じてんの？ もう、変なところマニャクなんだから。アタシは男なんだからデレデレなんかないんだからね！！」

「Oh！ Oh！ ハカセ、タマラナイデース！ ボクのホシではオトコモオンナもセイベツもナイデース！」

博士は色んな意味で青ざめた。身震いを起こす前に、色んな危機を感じた。

「はあ！？ オゲルちゃん今なんて言ったの？ あんた設定ではフランス人でしょ？ 星って何よ、星って！？」

#3【その 博士つたら】

ああ、何ということだろう。ヤッパリ。ヤッパリそうだったのだ。この目の前にいる奴のチャーシューみたいにゴツゴツした腕。どつかの改造人間みたいな無理矢理な胸筋、そして腹筋。まるで歩くギリシャ神話だわ。ヤバイわ、こんなの！

目だって尋常じゃない。若いとき金沢まで行って見た輪島塗を半分に分けて逆さまに取り付けたような虚ろなマブタ。蒼みがかったエメラルドみたいに透き通った瞳をしてるけど、そんな綺麗な瞳なものだから、かえって吸い込まれそうになるほど怖い！

時々そんな半開きな目で睨みつけやがる。怖いったらありゃしない！ それよりこいつモヒカンだ。

うつん！ それより何より、コイツはいつも上半身裸じゃないの！ 大体“これ”がまともな奴であるわけがないじゃない！

名前だって変だ。コイツの名前は『ジャン・バチスト・ブンドール』という筈だ。そうコイツのパスポートに書いてあったのよ。それなのにコイツったら「Oh！ ワタシノナマエハ『オゲル』トイイマース！」だなんて言って睨みつけたんだ。いや、睨みつけたんじゃないかもしれない。でもコイツの目はハンパじゃなく恐いのよ！ だから従うしかなかったのよ！ だからその日からコイツの名前を『オゲル』と呼ぶようになったのよ！

そうだ思い出した。思い出しましたとも。ああ、六年間も一体私は何をしていたんだろう。なんでこんな事に気づかなかったのだろう！？

考えてもみなさい。身長が三メートルと八センチもある一般市民がどこにいるというの？ 地球にそんな存在するの？ どのどいう所に行けば会えるというの？ ボクちゃんが知らないだけ？ うーん、ボクちゃんの世間知らず！

いくらボクちゃんが、子供のころから『神童』なんて呼ばれて青

い眼の異人さんにメリケンに連れて行かれたからって。いくら十才のときにハーバード大学を卒業しちゃったからって世間知らずだなんて思ったら大間違いだわ！ ボクちゃんだって苦労してるのよ！ 日本に帰って来た時、両親は隣の権蔵じいさんに三十円の借金が返せないから、なんて置手紙なんかして失踪しちゃったりして。だから大嫌いなリンゴを山ほど仕入れて果物専門店を作ったのよ！ 11才の時……。

ああ懐かしいわ。『少年フルーツ：ニュートン』。

そうよ、あれは売れに売れまくったわ。みんなバカだから、

「これはかの有名な科学者ニュートンが万有引力を発見したときに落ちたリンゴの種から栽培された、由緒正しいリンゴなのでしゅ！ てへ」

なんて言っちゃったりしたら、もうバカ売れ。商売なんかちよろいもんね。有名人の名前付けりゃウ。コだって売れちゃうんじゃないかと思っただくらいだわ。

でもその後がまずかった。調子に乗って二件目に手を出しちゃったのよ。『うま。棒専門店：斜塔』。なんてったって仕入れ過ぎたのよ。今度は「野口英世博士が黄熱病の研究のときこれにレンズを付けて細菌を覗いてたんでしゅ。てへ」っていうのはちよつとやりすぎたわ。有名人の名前付けりゃ売れると思ってナメテた。せめて「一休さんが和尚さんの毒入りの壺の中味を平らげちゃったのがこのメンタイコ味でしゅ。ニヤンニヤン」ぐらいしとけばよかったのよ。ああ大失敗！！ 人生の汚点ね。あれで当時三百億リラの借金を作っちゃったんだわ！

……なんて。

博士は遠い目で感慨にふけてしまっていた。年寄りには、ホント、たまにこうである。

「Oh！ ハカセ。シロメモカナイデクダサーイ！ モットなじってクダサーイ！」

オゲルは未だ赤くなり、モジモジしている。

#4【その 煌めくようなオゲルは……】

「や、やられる……!？」

博士は恐怖した。

当然だ。生きた不動明王の如き二足歩行の生物が、筋肉で張り出した巨体を艶やかにくねらせ、妖しい香りを撒き散らせて赤らんでいるのだ。これが危機でなくてなんであるのか？

嗚呼……

どんな貧困な時代であつても、博士自身そのプライドと魂だけは破棄しなかった男だ。

三百億リラの借金で十五才で初めて夜逃げを体験したときからこのかた、泥の水を舐めてでも、公園のくず入れのバナナの皮を前歯でガシガシ削つてでも生き延びて来た。

しかし、(多分)男というものにその体を明け渡した事は、一度たりともない。これは天地神明に誓つてもよい。

しかしどうだ。目の前の怪物がその巨体を武器にし凶悪にも抱きかかえられ、柔道の寝技のように強引に押し倒されたらひとたまりもない。あの土木作業の重建機のような剛手で鷲掴みにされたら、わめくまでもない。腕という腕、足という足に重厚な鎖を繋がれた海賊奴隷のように、身も心も蹂躪されるがまま。一生ほの暗い船底でオゲルという名のオールを漕がなければならないのか？ 守り通してきた操も、もはや不覚、強奪されるしかないのか？

そんなのいやだ。いやだ。いやだ。いやよ。いや。いや、いやいやいやいや……

「いやあああああつ!! ボーン!!」

一瞬閃光の様なものが走った。当然博士の頭ん中だけだ。辺りは……別段変わった様子はない。ただ禿げ頭のでっぺんから飽和に耐え切れなくなつた水分子が気体状に変化し、天井に上って行くだけだ。……つまり、勝手に妄想して自爆しただけのこと。その場にぶ

っ倒れて、白目を剥いて、口を半開きにさせ、体をビクビクさせている。

「Oh！ ハカセ。そのカオ、トテモイロツポイデース！」

変態発情巨大異星人ことオゲル君は、その赤らめた大胸筋の中に包まれたほのかな灯が、熱い鼓動に変わってゆくのを感じていた。

抑えきれない。抑えきれない。こんな気持ちになったのは生まれて今日が始めて。そう、この大銀河に生を受けて幾つかの流れ星にその身を預け、幾つかの白色矮星の横を通り過ぎたとき人生の侘しさ、儚さを知った。自分が誰で、何であるのかを知ることもなく通り過ぎていった超新星の日々。ああ無情。六本木心中。フウ！

フウ！ フウ！ フウ！ バブル万歳……。

溢れ出す思い。それは最高の抑止。それは至上の黙示録。

オゲルの大腦を駆け巡るのは正しく、

「ハカセ、ハカセ、ハカセ……。タロウ……。ウナギ……。ギアマン……。ツボ……。ボツタクリ……。シンジユク……。ニチヨウメ……。イツチヨウメ。イツチヨウメ？ 一丁目？ 東村山？ ヒガシムラヤマイツチヨウメ？ うーん……。イツチヨメイツチヨメ！ わーおー！」

センキュウ！

オゲルは両腕を高々と天高く突き上げ、人差し指を雲の上に突き抜けんばかりに指した。

ああ快感……

なんとという快感。これが悦というものだろうか？ これが悦びなのだろうか？

ありがとう。ありがとう博士。僕は貴方の助手でよかった。本当によかった。これが本望。我が人生に一片の悔いなし！！

オゲルの頭上から怒濤の如く降り注ぐ光が、その体を包み込んだ。なんとという至上のひと時なのだろう。なんとという柔らかな思いなのだろう。今ならイライザにいじめを受けてもきつと笑顔で返す事ができる。きつと。そうよ約束よ。そんな思いが彼の全身を駆け巡って

ゆく――。

しかし。しかしだ。まだだ。まだ終わらんよ！

終わってはいない。そんな決定権はオゲルにありはしない。まだ思い残す事が一つだけある。勝負。勝負だ。博士との勝負だ。オゲルは此の方博士との『発明一番勝負』に勝ったためしがない。だめだ。このままではワタシハダメ人間（？）のままだ。死ねない。死んでなるものか。うおおおお！

オゲルの常時半開きの目が激しい光を放った。それに乗り凄まじい豪気の渦が天空を舞い、地が割け雷鳴が轟いた。

「カハアアアツ！！」

猛禽類の翼のように左右に伸ばされた両腕が、大地の唸りを呼び覚ました。まるで御平家支払町全体が彼と一体化しているかのようだ。そしてオゲルの巨体を見守るかのような沢山の強敵の人影が映った。

オゲルは、この機に乗じて天高く突き上げた指をクルクルと回し、怪呪文を唱えた！

「マルピマルピ、アダチ。ツルタッチでハカセがゲンキにナレー！！」

片足を小粋で可憐なプリンセスの如く跳ね上げ、春の野に漂う蝶のように舞った。

するとどうだろう。今まで白目を剥き、体をビクつかせていたマッド軍曹こと松戸博士は、マムシ酒が効いたみたいにシャキーン！と起き上がったのである。

「ただいまぁーっと！」

#5【その 素敵な思い出の箱は……】

それは突然過去から帰ってきたようなテンションであった。

「いぶりがっこのはじめてって、感動的だったわ……」

と博士は言っているが、この話とは関係ないので省略。

それより何より、とても嬉しそうなのは巨大フランス野郎のオゲル君なのです。

「OH！ OH！ OH！ 王者の風よ！ ヨカッタ、ホントウニヨカッタ！ コレデマタハカセト勝負デキマース！」

その涙は、宇宙の果てのどこまでも流れて行くような気がします。まるで天使の歌声と共に一本足打法で金色のバットを振りまわすミカエルが、ホームランを打って、まばゆい光のコントラストを描きながら地上の私たちに幸福と安らぎのカクテル光線を見せてくれているかのよう……ウフフ。（↑だ、誰が話しているの？）

そう、ここネオ・ジャポンでは、毎年恒例のイベントが開かれています。なんだか摩訶不思議。（↑だから、一体誰が話しているの？）

それは国民の皆さんが待ちに待った『天下一発明工夫武闘会』なのです。ネオ・ジャポン中の発明家の方々や他の国々から集まったマッドサイエンティストさん達が、一斉に腕によりをかけた作品を見せびらかして力量を自慢しあう、それはもう素敵な素敵な大会なのです。（↑誰が知らんが、進行を奪われてしまった……）

松戸博士はその大会の第756回大会の優勝者だなんて、何て素敵なのでしょう！

今年はその会場がこの御平家支^{おっぺけいぢょう}払町だから、二人はすごい気合十分なのです。

「oh！ ハカセ。気ガツキマシタカ？ コンドノ『天下一発明工

夫武闘会』ノマエニ、クタバッチマイヤガツタラ、サミシイカギリ
ナノデース！」

オゲル君はとっても嬉しそうです。博士もちよっぴり顔を赤くして、照れ笑いを見せています。

「あ、あんたがボクちゃんを助けてくれたの？ フ、フンだ！お礼なんか言わないんだからね！ 助けてくれたなんて一言も言っていないんだからね！ で、でもしょうがないわ。三途の川から呼び戻されてしまったから、とことん生きてやるしかないわね！」

その七十七才の博士の表情ったら、まるで溶鉱炉でドロドロに溶けた鉄の色みたい。ううん、1300度の高温で焼かれてゆくセラミックの表面みたい。そのでっかい夕暮れに似た色は、どこか諸行無常で、どこか儚げ。兎に角でっかい素敵なのです。

博士は気を取り直してオゲル君に質問をしました。

「あ、あんた。さっき発明が完成したなんて言ってなかった？ こんな夜中にボクちゃん部屋の扉をぶち破って入って来たんだから、それ相当の発明品が完成したんでしょね？」

「oh！ ソレ、モットモナ話デアリマース！ イトオカシナ、素晴シイモノガデアガリマシート！」

オゲル君はそのエーゲ海のような瞳を輝かせて、少年のように上腕二頭筋をブルブルと震わせました。素敵です。

「なら見せてみなさいよ。ボクちゃんのお眼鏡に適うようなものでなかったら、ただじゃおかないんだから！」

「oh！ ワカリモウシタ。ソレデハコノ箱ヲアケテクダサーイ！」

オゲル君は、太陽のコロナのように大きくて温かな手で博士に発明品の入った箱を差し出しました。その箱は檜の香りがする素朴な箱です。

だけどなんだか手作りのいい感じがして、とても心が込められているような気がします。まるで作り手の優しい温もりまでもがこっちに伝わって来るみたいで…… いっぱいいっぱい素敵が詰まった箱なのです。

「オゲルちゃん、この箱が発明なの？ 檜で出来ているの？ 不思議と人間の安らぎを感じるとは?!」

「oh! ソレ違イマース! ソレハタダノイレモノデース。ソノヘンニアツタ木材を圧縮してツクリマシータ!」

「その辺にあつた木材を圧縮?」

博士はとても怪訝な顔をしました。だって知らない木材なんてないんですもの。あんまりお金持ちじゃないから、部屋のドアだってベニヤ板で出来ているし……。木材の中でもとても高価な檜の木材がその辺に転がっているなんて……。

博士の頭の中は、沢山のはてなマークで満たされてゆきます。でも一つだけ思い当たる節があります。うーん、でもそんなのあり得ない。だってそんな事あるわけがない。信じたくない。でも社交辞令的に聞いてみようかしら……。なんて思つたわけです。

だからアメリカンジョークさながらに博士はオゲル君に聞いてみました。

「ちょ、ちょ、ちょこつと質問なんだけど。そのネバーランドみたにないかした箱の材料、何処で手に入れたの?」

「oh! モチのロンデ、コノ家ノナカニキマツテイマース!」

「あは……。そ、そう、じゃ何処の部屋にあつたのかしら?」

「oh! ソレハ今ツカツテイナイ部屋デース!」

「つ、使っていない部屋? それって畳が敷いてある部屋のことでは……?」

「oh! マサニソレデシヨウ!! 老ケタ地球人ノフォトグラフガ飾ツテアル線香クサイ部屋デース!!」

「ギヤアアアアアツ!!」

博士は卒倒しました。カイゼル髭が逞しい口元から、沢山の泡を吹き出しました。素敵です。

だってその檜の香りのする素敵な箱は、二十年前に亡くなられた博士の奥様の絹子さんの大事な形見のタンスだったからです。

博士は泣けてきました。それは博士の大切な思い出が詰ま

ったダンスだったからです。

#5【その 素敵ないい出の箱は……】（後書き）

これを読んでいるそのあなた！

こんなヘンテコな読みものを、よく読んでくれていますね。

でっかい素敵です……

#6【その ツンとくる香辛料は……】

あれは十五才で夜逃げをして、悪の組織の片棒を担いでいた若かりし時代の事です。その悪の組織が壊滅。追いつきをかけるようにして迫り来る『組織狩り』から逃れ、単身でこの町にやって来たのはもうロンゲロンゲアゴー。

そんなよそ者の博士に、この町の人たちはとっても冷たかったです。

「さあ、行った行った！ 怪しいよそ者に食わす売り物なんかないね！」

お店に顔を見せれば、たちまち門前払い。店主にしつこく食い下がれば、フライングトルネード回し蹴りを食らう有り様。米の一粒たりとも買えなかった。住むところもない。雨をしのぐ所も、風をしのぐ所も、涙を拭くハンカチさえなかったのです。

「アララ……。ボクちゃんの自慢のお髭もお腹が空きすぎてへし折れてしまったわ」

涙の類はとうに枯れていました。ただ腹の虫だけは見事な大合唱。動く気力さえないのに、お腹の中だけは空元気……。

空き地の土管の中から見えるのは、雲ひとつない夜空。あの輝く星の一つ一つが氷砂糖で出来たお菓子に見える。博士は、それの一つ一つまんでは口の中へ贅沢に放り込む。放り込んだ瞬間、ひんやりとした舌触りがする。まるでお口の中がクーラーです。そのひんやりは頬の裏、舌先、下の裏側、また舌先、そして顎の裏と舌の上でサラリ……と溶けてしまう。甘い甘い。それがご馳走。こんなに美味しいもの、今は博士だけの独り占め。だからまた土管から首を出し目一杯手を伸ばしてみる。

「今度はあの星なんかどうかしら……」

それを指で摘まむ。今度の砂糖菓子とはびきりでかい。白く光っていて大人の味。苦い？ 甘い？ ううん……しょっぱい。どうし

て？ 砂糖菓子のはずなのに……

「ボクちゃんの涙はとうに枯れたはず……。なのにこの目の中から出てきている液体は一体なんなの……？」

博士の痩せつぼちの体は、もう何日も飲まず食わず。追われるものの宿命つてやつ？ お金は持っているけど五百円札が二枚だけ。きつとかけそばなら二、三杯くらいなら食べられるかな？

でもこの町の人だーれも相手してくれない。そればかりか塩まで撒かれちゃった。

「きつと子供のころインチキ商売なんかして儲けたから、天罰が下ったのね。ボクちゃんこのまま干からびてお星様になるのかしら」

博士はそんな事を言いつつ、夜空に浮かぶしょっぱいお星様を次から次へと運んでゆきました。

「あら素敵！ 何をなさっているの？」

土管の中から上半身だけ出して仰向けの博士。春風の舞う生暖かい夜。星を食らう怪しい男。その姿を見て何の疑いもなく声をかけてくるのは、真っ白な割烹着に三角巾。襟元からピンク色のカーデイガンといういでたちのうら若き乙女。

博士は涙も拭かず言いました。

「ボクちゃん……い、いや小生、今は握りずしを愛でながら月と語り合っていたところです。ちょっとだけワサビがきついようで……。ご一緒にどうですか？ 貴女も」

どう考えてもやけくそです。ちょっぴり気取ってみたけれど、やっぱりどうして何か変です。でも彼女は楽しげな顔をして言いました。

「宜しいのですか？ お邪魔しちゃって」

「どうぞどうぞ。こちらの席が空いております」

博士は隣りの土管に寝転がったまま手を添えた。

「ではご相伴にあずかって……」

うら若き乙女は、真っ白な割烹着が汚れるのも気にせず、持っていた岡持ち（出前など運ぶもの）を置いて、その中へ入った。

彼女の目前に広がるもの。それはいつも当たり前前に広がった夜空。必然の夜空。でも、今まで味わった事のない世界。金や銀に光る星無限を流れるプラチナの大河。銀河を走る永遠の超特急。見える見える。信じられない。この世界の中にこんな美しいものがあつたなんて。気が付かなかった。夜はお店の閉まる時間。寝る時間だと思つていたから。明日も朝早いんだなつて、準備をする時間だと思つていたから……。

「ステキ……」

彼女の口から、自然と言葉が漏れた。いや、それだけではない。その満天の星空を見つめる瞳からは、ぼろりぼろりとしよっぱい液体が……

「あれ？ 何だかわたしもわさびが効いちゃったみたい。えへへ……」

乙女は、恥ずかしそうに照れ笑いをしてみせました。博士はその笑顔に思わずドキッ！ 横においてある岡持ちの中身の美味そうな匂いにもドキッ！！

「あら？ アナタお腹空いているの？ おかめうどん。出前先の注文ミスで余っちゃったの。冷めてのびちゃってるけど食べる？」

乙女は、屈託のない笑顔で博士に言いました。

「え？ あーえーと……。ボクちゃ、じゃなかった。しょ、しょ小生、今寿司をたらふく食べて腹がはち切れそうだけど。ま、ま、まあいいわ。食べてやらないでもないわ。丁度小腹が空いてきたところだし。うどんは別腹って言っしね」

「あら？ うふふ。うどんは別腹なの？ うん、いいわ。素敵なお馳走してくれたお礼よ」

乙女は、そう言って冷め切ったおかめうどんを博士に手渡ししました。勿論博士はカール・ルイスさんより早く食べきりました。

「おいしかった？」

「ま、まあまあね。おつゆの滲みた伊達巻が特に……」

「そう、よかった。わたしは絹子、そのうどん屋の娘よ」

「しよ、小生は群荘。松戸群荘。みんなはマツド軍曹なんてよんでるわ」

「まっどぐんそう？ うふふ、面白い名前ね」

博士は、絹子さんの透き通った笑顔に魅了されました。今まで殺伐とした裏世界に従事していた事を思うと、天と地ほどの差がありました。

博士はその後、絹子さんのその笑顔が欲しくて欲しくて一生懸命頑張りました。町の人たちに認めてもらい、絹子さんにも認めてもらえるよう、得意の発明でその名を轟かせました。そして第756回『天下一発明工夫武闘会』に出場して、あらゆる敵を済崩しにしました。その大会の賞金で買った唯一の家財道具が、あの檜のタンスだったわけです。

「ああゝん！！ きぬこおゝん！！」

松戸博士の涙はわさびの涙ではありません。

#7【そのほのかな疑問符は、】

わさび……清流……淑女……美人……ヴィーナス……ちよつとやりすぎな婦人警官……ザ・ゴ・ラ……44マグナム……バントラインスペシャル……木曜ス。シャル……UFOスペシャル……矢追純。……井。純一……学生服……穂積。ペ……餃子……焼く……蒸す……揚げる……ピロシキ……ロシア……ダー（ロシア語）……1・2・3！……ア。トニオ。木……エノキ？……ヒノキ？……ひ、檜……！！ダー！！

「ちよつと、オゲルちゃん！ どうしてくれるのよ！ ボクちゃんのワイフとの大切な思い出の品をこんなにしちゃって！ もう……あゝん」

博士は、まるでポロツカのような勢いの涙をこぼしました。あんまりポロツカには意味はありませんけど……。

それはそうです。それはそうなのです。オゲル君はとってもヒドイ事をしてしまったのです。だって、その素敵な思い出のタンスは、大体の目算で1/144スケールに縮小されてしまったのです。値段にすると300円程度。とにかく、木の継ぎ目から引き出しの寸法まで元からの大きさが、そのまま小さくなったものなのです。

それに、なんとなんと！ ご丁寧に引き出しの取っ手までもが小さく圧縮されているのです。驚きです！ 桃の木どえす！ だって金属がですよ。金具の取っ手が、そのまんまの形で付いているのです。これに驚かないんじゃないんだめなんです……

うつん、もつと驚くことがあります。それはこの箱、もとのタンスの重量そのままな事です。こんなに小さいのにやたら重いんです。軽く二十キログラム以上はあるでしょう。ということは……、えつと、つまり……、オゲル君は、博士と奥様の大切な思い出のタンスを。モールライトとかガ。リバートンネルの類の道具を使って小さくしたんじゃないって事です。えっ？ じゃあ、どうやって小さく

したかつて？　そ、それは……

「オゲルちゃん！　一体全体なんてことしてくれたの！　ああ、そんなことなのね。そういうことだったのね。あんたの発明は“物質を圧縮してしまう装置”だったのね！」

博士が泣きながら少し感心しているところで、オゲル君は欧米風に首を横に振りました。

「OH！　ハカセ。ソレチガイマース。ソレハ発明デハアリマセーン！」

「なんですって？」

「OH！　発明デハナイトイツテイルノデース！」

「じじじじじじじ、じゃ、じゃあこのタンスを小さくしたのは何でやったというの？」

「OH！　ソレハ『手』デース！」

「手？」

「OH！　ウイ、ムツシユカマヤツ！」

……手？

博士に途轍もない衝撃が走りました。

だって、もともと二メートルぐらいあったタンスが、手のひらサイズの小箱になっちゃったんですよ。タンスだった時は二人掛かりで運んでいた大物なのに、今は宝石とかアクセサリーとか入れておくような小さなものになっちゃったんです。しかも重量そのまま……。

それを“手”だけで小さくしちゃったなんて、ちゃんちゃらおかしいです。信じられません。「まるで漫画だぜ、漫画！」とか言っちゃいたいくらいです。

それでも博士は科学者ですからそれ相当の分析もしているわけです。

——木、木なら何とか分らないでもないわ。ほら、木なら密度は濃くないから、空気の間隙が押しつぶされてこういう風になった……と考えてもいいかもしれない。かなり強引な想像だけど。でも、

でも、でもね。問題はこれよ。この取っ手。この取っ手って金属よね。鉄よ、鉄で出来ているのよね。それがそのままの形で百分の一以上に圧縮できる？ それも人の手で？ ううん、こいつ人じゃないけど。こんな馬鹿でかい体してるから物凄い力があることは想像が付くわ。でも、でもでもでもでもなのよ！！ いくら力があってもこれは正直言って有り得ないわ！ だって考えてみて御覧なさい！

こいつが、このでっかい巨体をした異性人がいくら超強力だったと仮定しても、鉄みたいな金属がこんなに圧縮できて？ 物理的におかしいわ！ 金属の密度がこんなに詰まる事なんて有り得る？ それも一生物の力で。

そそそそそ、そうよ！ こいつボクちゃんをからかっているんだわ。「オー！ハカセ、ジョウダンデース！ ソレハ鉄ヲケズツテツクリマシータコノミ！」とか言っちゃって話題づくりをしているんだわ……。 (しばし沈黙) いいえ！ ダメよ！ ダメ！ ダメダメダメ！ ダメよ松戸群荘！！ それでもあなた科学者！？ 現実から目を背けるつもり？ アンタも科学者のはしくれなら目を背けちゃダメ！

見てみなさい。その取っ手。ほら、触れてみると解かる。その感触は鉄の重さじゃないわ！ どう考えたって比重が違いすぎる！ まるでこの小ささにしてこの重さは……。でも、見た目は普通の取っ手と変わりはない。ってことは……。 やっぱり……。 圧縮した？ そんな馬鹿な。いくら力があっても、コイツにどんなに力があっても鉄は粘土を潰したみたいに手のひらからニユルニユルツと出てきてしまうはず。それなのにそれをそのままの形で圧縮したとなると――

博士はとってもとっても焦りました。いいえ、焦った、というより有り得ないほどの戦慄が奔りました。

むずかしい事はよくわかりませんが、博士はさっきから「ブラックホール化」とか「爆縮」とかブツブツと言っています。ホント、

科学者とか作家って変な人が多いですよ。

#8【その 悲しみの交差点で】

そんな事はさておき。

オゲル君の様子が変です。あの十和田湖のように深く、エーゲ海のように妖しげなエメラルド色の瞳を博士に差し向けて、ジーツと動かしません。あのセコイヤの大木のような腕を前に組み、タワー・オブ・バベルのような足を凱旋門のようにして立ち尽くすあたりは、まるで何事の恐れからも勇気を辞さない、いきり立った羅漢、仁王像さながらの構えです。

ああ、彼の辺りの空気が張り詰めています。湯気が立ち上っています。モヒカンがゆらゆら揺れています。一体なんなのでしょう。怒っているのでしょうか？ 泣いているのでしょうか？

うーん、普通なら怒っていると思って間違いないでしょう。

ですが、博士が怒られる筋合いはありません。大体博士の大切な品をこんな風にしてしまったのはオゲル君なのです。博士が怒っても、オゲル君が怒るのは筋違いも甚だしいのです。でも、博士は怯えています。当然です。しかし！ ヘタすりや地球さえ圧縮しかないエセフランス野郎に逆らえる道理がありません。はつきり言うて恐怖です。もう恐怖です。つ。だじろう先生の漫画を読んだとき以来の飛び切りの恐怖です。博士はおもむろに目が菱形になっています。博士の後ろに何やら平安貴族のような人影が見えます。犬も喋っています。新聞も配られています！ しかしそれは幻覚です。幽霊の正体見たり枯れ尾花。博士はとっても臆病なのです。

実のところ、オゲル君はちよっぴり反省してただけです。本当は「てへっ！」とか言っちゃたりして、謝りたかっただけなのです。

ああ、何て人間関係は難しいのでしょうか（片方は人間じゃないけど……）。こちら側が近寄ろうとしても、あちら側が慌てふためいてしまう。だからと言って簡単におどけた態度を見せる事なんて出来やしない。ああ悲しみや人間。ああ慈しみや人間。全ての人間

がもつと器用であればよかったのに。全ての人間がもつと心を通い合わせる事が出来ればよかったのに。そうであれば、これから起る悲しみなどあるう事はなかっただろうに……。

もうオゲル君は我慢出来ず、その箱を搔つ攫さらいました。それはものの凄い風圧でした。博士はビクツ！と体をすくめました。が、自慢のカイゼル髭が揺れただけでした。そのぶっきら棒な態度に博士は何かとんでもない怒りがあるのだと勘違いしてしまいました。「きつとオゲルちゃんはこのボクちゃんの態度が気に入らなくて怒っているのだ」と。

しかし、オゲル君はちつともそんな事考えていません。早く博士に自分の発明品を見せたくてウズウズしていたのです。とても大好きな博士に。心から尊敬と畏敬の念と愛情を贈っても贈りきれない松戸博士に。自らが発明したものを見てもらいたかっただけなのです。

それでも心は、まったく通じていません。マッド軍曹こと松戸博士は、子猫のようにブルブルと体を震わせ言葉ひとつなく立ち尽くしています。

「OH！ハカ……セ。」

オゲル君は、何とかかんとか心を通わせようと言葉をかけましたが、博士に反応は全くありません。博士は怯えたまま、こっちを見ているだけです。

その時、オゲル君は思いました。

（ワタシハ、ナンテ事ヲシテシマッタノダロウ）と。

地球人は儚い。自分と比べたら寿命も相当短い。殆んど一瞬にして命を終えてしまう。そんな地球人はこんな自分に自我と慈しみを分け与えてくれた。あれは六年前――。

ひよんなことからこの星に迷い込んで以来、いやな顔ひとつせず（？）住まわせてくれた。気さくに付き合ってくれた。

それまでの自分は、なんと殺伐として生きてきたことだろう。なんと味気ない時を過ごしていたことだろう。

空間を膨らませ、物質をかき集め、星を創り、海を創り、生命を創り、文明を創り。地獄の強制労働に明け暮れ、自我をどこかへ置き忘れてきてしまっていた。それからどの位の年月が過ぎ去ってしまったことだろう。そんな自分に心を教えてくれたのは、いうまでもない。そこにいる、目の前にいる博士なのだ。

だが、自分は甘えていた。この人に甘えていた。どこか人間として、地球人として馴染んできたと思っていたが、それでもワタシはワタシなのだ。地球人にはなれないのだ。

見たまえ！ この地球人の繊細なところを。

見たまえ！ 地球人のこのひと時ひと時を大切に生きることを。自分に比べて遥かに短い一生で暮らす地球人は、そのひと時ひと時をこうも大事にして生きているではないか！ 一瞬だけでも光り輝こうとしているではないか！ その一緒に暮らしてきた大切な思いまでも胸に抱いて。

これでは地球人にはなれん！ なれんのだ。このままでは一生、地球人になる事は出来ないのだ。だめだ、だめだ。だめだだめだだめだ！ 博士だって御歳もう先が短い。どうにかしてこの人に認めてもらうんだ。この人に「あゝら！ 凄いじゃない。オゲルちゃん」って言うてもらうんだ。

……とまあ、オゲル君は茹だっていました。そう、怒って見えた湯気のたち具合は、オゲル君の心の葛藤の表れだったのです。

#9【その 傲慢な人間どもよ！】

「くはあっ！ もう、どうにでもなれよ！ 煮るなり焼くなり好きにしてチヨウダイ！！」

博士は、そのか細い体を、ベニヤ板の残骸が散らばる床にあずけ、大の字になって寝そべりました。

どうやら覚悟を決めたようです。こんなでっかい宇宙人に逆らったってどうにでもなる事もあるまい。いくらあがいたって、もがいたって、ボクちゃんはペシャンコにされて、グチャグチャにされて、血反吐なんかとんで、はらわたなんかブニョーンとか飛び出して、目玉なんかプチツとかいっちゃったりして潰されちゃうんだわ！なんて、完全に頭の中だけの妄想で、自分の体をスプラッタ化しちゃったのです。

でも、それはホントに妄想です。完璧な被害妄想です。被害妄想は危険です。被害妄想は完全なる仮想敵国を作り、ありもしない憎しみを生み、やがて増幅し、風船のようにパンパンに腫れ上がった状態にまでなったときにはもう、手遅れなのです。

博士は、もうその一步手前まで来ています。何てことでしよう！

マッド軍曹、いいえ、親愛なる松戸博士に少しでも理解を得ようとする無垢な宇宙人オゲル君は、ただ博士に自分の発明を評価して欲しかっただけです。見てもらいたかっただけなのです。それがどうでしょう。博士は自らの安全と保身ばかりを考えて、オゲル君の純真な気持ちまでを理解しようとはしていないのです。悲しいです。悲しいのです。そんな悲劇があつてよいのでしょうか！

いいえ、博士は決して悪い人ではありません。確かに若いころ、悪の組織の参謀とまで言われた経験を持つ彼ですが、絹子さんの温かな笑顔で心を入れ替えたのです。

しかし悲しいかな人間。人間の持つ許容量は既に限界なのです。

私の持つ力量より上の存在に対峙してしまうと、もう本能的に蛇に睨まれたカエル同然なのです。カエルならまだいいです。だってカエルさんは睨まれてから、別に何も考えないでしょうから。でも人間は賢^{さか}しいのです、小賢^{こやか}しいのです。下手に前頭葉なんてものが、少しくらい他の動物よりも大きくくつついているものだから、余計な事を考えてしまうのです。

恐い。怯える。逃げようか、留まろうか。いや待てよ。妄想妄想また妄想！

それは多大なる被害妄想へと変換され、やがては憎しみへと変わって行くのです。酷いです！ 非道すぎます！ オゲル君にはこれっぽっちも博士を攻撃する意思なんてないのに！ これっぽっちも威圧する意識なんてないのに……

「OH！ハカセ……」

オゲル君には、博士の恐怖心の意味が分かりませんでした。しかし、自分を恐怖して、おののいている事だけは伝わってきます。

何故なんだろう？ どうしてなんだろう？

自分は何も悪い意思なんて持っていたわけではないのに……。自分はちよっぴり博士の物をいじってしまっただけなのに……。これだって、この博士の大事だと今知ったこの『箱』だって、「元の姿に戻しなさい！」となじってくれば今すぐにでも簡単にもどせるのに……。 (ええっ！？)

ただ、オゲル君は博士にかけてあげる言葉が見つからなくて、とても困っていました。だからこの際、強引でも博士に自分の発明品を見てもらうことにしました。結果、博士がどんな態度に変わろうとも、見てもらって評価を得られるのなら、それが満足ってものなのだと思えました。

あの素敵な『箱』に手をかけるオゲル君。その慈しみの通った素敵色の箱は、たった今開けられたのです。小さな引き出し。小さな取っ手。何もかも絹子さんとの思い出で素敵色に染め上げられてき

た箱は、中味のものでさえ、素敵色一色で染め上げられていました。
「OH！ ハカセ！ ヤツテクサーイ！ ミテクダサーイ！ コレガ
ワタシの最新の作デース！」

オゲル君のそのドデカイ手の中に預けられた発明品は、小さくて
長細い先端にブラシのようなものがついた物でした。

「オツ、オゲルちゃん！ そ、それはっ！？」

#10【その 力の源、静かに……】

博士は飛び起きました。海面から勢いよく飛び出るフライングフイッシュのように、ビヨーンてな感じで飛び起きました。

その博士の起き上がり方は、途轍もなく重力と言うものを無視したような起き上がり方でした。腕とか足とか全然使わなくて、体全体が一本の棒のようになり、それがそのまま立った……ってくらいの起き上がり方でした。

おまけに目も飛び出ていました。鼻汁も飛び出ていました。お髭も一直線に伸びていました。素敵です。でもなんでこんな風に博士は驚いているのでしょうか。きつとそれは……

「ちよちよちよちよちよちよちよとぉ！！ オゲリちゃ、じゃなかった…… オゲルちゃん！ それどうしたのよ！ アンタそそそそれ、それ、それ……」

その博士の動揺ぶりつたら、とにかく半端なもんじゃありません。そりゃ博士は今の今まで何度となく動揺と恐怖と妄想の繰り返しでしたが、今回ののはそんなもんじゃないって事なのです。酷く動揺してるって事なのです。

「OH！ ハカセ！ コレハワタシノ自信作。『虫歯なくす君』《竜一号指令》『デース！』」

オゲル君は、何だか満足げにそれを見せています。オゲル君のその大きくってゴツゴツしていて素敵色の手の中にある物は、ちっちゃくって儚げで、それでももつてもの凄い力を秘めているように見えました。その発明品を見せているオゲル君のその表情は、しっとりとしてまったりとして、とても素敵色のモアイ像のようです。でもその博士つたら……

「ちよつとちよつと！ それどこから見つけてきたの！？ それはボクちゃんが以前発明した《ハイパーアトミックモーター》じゃないの！」

博士はそう言いながら、ちよっぴりちびつちやいました。もうお年なのだから膀胱が緩んでいても仕方がないのですが、それでも何だか恥ずかしいです。後でパンツを脱ぐときショックを受けなければよいのですが……。

でも博士はそんなことはお構いなしのようです。だって股間の辺りなんて全く気にしていないんです。それより何より、博士はオゲル君の発明品のほうに釘付けになっています。

「ああああああんた！ そそそそそれが何なのか分かっているのでしょうね！ そそそそれは……！！」

そうそれは……す、素敵、色の……

（えーと、ナレーション、タッチ交代です！）

（ええーっ！？）

——そう、それは博士。つまり松戸群荘ことマッド軍曹が若かりし時代。世界をこの手に治めようと野望という名を研ぎ澄ませていたあの頃。我が名をこの手で世界に知らしめ給う頃の話だ。

そうあの頃、彼は地下秘密組織「オーラ・ムンド」のサド総帥の下で働いていた。

しかし、その行く手を阻むジャンガラ戦隊ドナイダーの抵抗にあり、その野望も風前の灯（とも）となっていた。

何としても。何としてもこの世界を茗荷（みょうが）のいっぱい生えた素敵王国に作り変えたい！ 大好きな茗荷のあの香りの中でこの一生を添い遂げたい！

きざんでそのまま醤油をかけて食べる茗荷。

そうめんの薬味にして食べようっていう茗荷。

味噌をつけてそのシャキシャキ感を楽しんでもしもう粋な茗荷。

いや、天麩羅のあの独特の風合いもたまらない！ 甘辛い酢味噌で合えた“ぬた”なんかもかなり“おつ”というものだ。

ダメだ！ ダメだダメだダメだダメだ！ ダメデッ痛っ！（舌嚙んだ）あいつら何かにボクちゃんの大いなる夢を砕かれてな

るものか——！！

とまあ、そんな熱い心を胸に抱いて世界征服を目論んでいたのだ。
った。

だが、あのジャンガラ戦隊ドナイダーはかなり強敵だった。あの念仏踊りの傍若無人な攻撃は流石の博士のコイヘルペスロボの力^{りき}を持ってしても歯が立たない。あのパワーの源はなんだ？ あの祐天寺博士の造ったジャンガラパワーの源は何なのだ！？ 松戸群莊博士ことマッド軍曹は悩んだ。おいに悩んだ。

「ボクちゃんは、あの坊主頭のへなちよこ科学者に負けているとでもいうの？ あのへなちよこオカルト科学者に劣っているとでもいうの？ そんな事はないはずよ。そんな事はないはずよ！ ボクちゃんにだって、ボクちゃんにだって……」

その時、博士の後ろからこの世の者とは思えない力の湧いてくるような声が聞こえてきた。

「あせりすぎよ。だからいけないの……」

「パワーがダンチなんだよ。そんな時はどうすればいい？」

その何処からともなく勇気付けてくる声は、さっきビデオで見ていた某ロボットアニメのラストシーンだった。マッド軍曹は、その物語のファンだった。

しかし、マッド軍曹は気にしなかった。その台詞と共に復唱し、入り込み、叫んだ。

「よーおっし！ ボクちゃんのこの頭脳をみんなに貸すぞ！！」

#11【その熱き心に……】

そげん博士は見たこともなかった。今の今までの博士とはまた一味違って激辛な感じだった。

そう、少年時代に売りさばくことが出来ず、クソまみれになるほどの借金を抱えてしまったあのメンタイコ味のう。い棒のように中途半端に辛かった。

「見てらっしゃい、祐天寺！ 見てらっしゃい、ジャンガラ戦隊ドナイダー！ アンタたちのひよろい正義感なんか叩きのめしちゃってくれるんだからあっ！！ あんだらみだいなデレスケどもにカツクラつけてやんだがら！ こっちゃんこ。ぶっ潰しちゃる！」

……博士は意味不明なものにとり憑かれた。

だが、人の勢いというものは侮ってはならない。その博士の体から溢れ出るパワーは並々ならぬものだ。本物だ。

少々吊り上がり気味の一重まぶたからは刃先鋭い剣のような稲光が放出し、ドクロのなりそこないのような口や鼻からは紫や桃色といった細かい粒子状のエクトプラズムが不気味に湧き出てきたのであった。

燃え上がる、燃え上がる、熱く燃え上がる。燃えるほどヒート！ 灼熱、灼熱、燃やし尽くせ我が命！

命は力なんだ。魂の雄叫びだ！ 力が正義ではない。正義は茗荷なんだ！

勝ち続ける人生なんて面白くないぜ。負けても負けても負け続けたも勝利に向かって這い上がってゆく旅路が面白いのさ！

やってやる、やってやるぜ！ やってやりますともこの命燃え尽きるまで！ せっかく産まれ出でたこの人生。五体満足そろいもそろって沸き出でたこの体！ やって出来ない事などあるものか！ やってやれない事などあるものか！

ボクちゃんは負けやしない！ ボクちゃんは負けやしない！ 祐

天寺なんかに負けやしない！ 熱い熱い情熱だけは負けやしない！
誰にも誰にも負けやしない！

雨の日だって風の日だって雪の日だって嵐の日だって、ボクちゃんはずっと生き延びて来たじゃない。どんなに腹ペコだって生き抜いてこられたじゃない。

ボクちゃんは強いだよ！ ボクちゃんは天才なのよ！ ボクちゃんはマッド軍曹なのよ！

必ずやってみせる。必ずアンタたちをやっつけてみせる！

おんやおよす

御八百万の神！ 南無八幡台菩薩！ 日光の権現！ 那須の湯泉大明神！ ボクちゃんはね、祈ったりなんかしない。願ったりなんかしない。そんな他力本願な事で勝とうだなんて思ったりしない！

……でもね、誓うわ。

あんた達偉そうに上から見下ろしている、あんた達に誓う。

ボクちゃんは負けない。負けたりなんかしないんだからあ！ あんた達がもし全員敵になったとしても、ボクちゃんは絶対負けたりなんかしないんだからあ！！ やってやるんだからあ！！

——さんざめく木々の山あいが揺れた。一片の曇りもない神々しい空が唸った。心の父である大地が震え出し、人類の母である大海原が轟き出した。そして、尽きる事のない茗荷帝国建国を夢見て止まぬ、マッド軍曹の魂の鼓動が震え出した！

「うおおおっ！！ スーパーエレクトリックサンダー炎の水魚のポーズコマヨツビシハイユニット発明二枚返しっ！！」

博士は飛んだ。

世界屈強の発明部屋とも言えるオーラ・ムンドの秘密のアジトの一室で、一人寂しく飛んだ。組織の部下も上司も同僚もない、個別の研究室の片隅で飛んだ。だーれも見えていないのにも関わらず、飛んだ。しかし、その博士の姿は、神か天使と見紛うほどであった。普段から研究で外になんか出たことのないモヤシの如き体軀は、床より１７フィートほど飛び上がり、ひとしきり発明品の立ち並ぶ宙へと舞った。そして宙を舞った体は、縦に反転し、足が天を

指し、頭が地に向かう。その体軀のしなり具合の見事な事といったら、余りにも美しくて例えようがない。しかし、あえて例えるのなら、それは名古屋城にその幽玄な風格で態を成す鯨しやちほいと言っておこう否、鯨の姿をした炎！

——博士は腕をクロスさせている。一重まぶたをつむっている。伸身の体軀を菊きくいちもんじ一文字いや、和泉守兼定の如く反り返させる。

「むふあああ……たあー！」

掛け声は一瞬であった。光陰の如き一瞬であった。

クロスさせている貧弱な腕から、炎が舞い出でた。そして、コマの形をした炎と水魚の形をした稲妻とチビた鉛筆の形をしたオーラが、発明台の上にあったものをひとつのユニットに変えた。あのゲ。の聖地とも言われる夜の東神奈川公園のくずかごの中にあったガラクタを、一瞬にして地上最強のパワーを持つユニットへと変換させてしまった。

これは凄い。これは凄いことなのだ。

これを奇跡と呼ばずして何を奇跡と呼ぶのであろうか！？ 何を偶然と呼ぶのであろうか！？ うーん、やっぱり偶然なのか！？

だいたい博士は発明家だ。科学者だ。それなのに、奇妙奇天烈へんちくりんな技を使って、何でこんな事ができたのであろうか！？

それは作者が悪いのだ！ 作者が変な脱線をするから悪いのだ。

当初、SFサイエンスフィクションというカテゴリーで書いていたこの作品を、昨日からフアンタジーに変更してしまったせいなのだ！！

——ブハアアア！！『錬金術！』

なんて事だ。なんて事だろう。まるで収集がつかない。オチは決まっているのに、そこに辿り着くまでがこんなに困難だったとは！急がば回れというが、回りすぎなのは良くないという証拠だ。

さあどうなる、軍曹。さあどうなる今後の展開！ 明日の地球の命運は君の双肩にかかっている。君の——フゴッ！！

「さつきからうるさいわねえ。どこのどいつかしら？ ボクちゃんの研究室に『おしゃべりくまちゃん人形』なんておいたの。まった

くしゅわいったらありゃしないー！」

#12【その いたいけな戦士どもよ】

博士の、そのまだ張りのある頬が少し引きつった。

この、込み上げてくる野心めいたそこはかとなない達成感と、欺瞞にも似た爽快感で二やつかないではおれなかったのだ。博士は『おしゃべりくまちゃん人形』をわなめく手で出来るだけそつとテーブルに置いた。

「要するにパワーの問題だったのよね。パワーの。そのダンチだったパワーが今、克服されたのよ。この《ハイパーアトミックモーター》のお陰でね」

そう。あの憎きジャンガラ戦隊ドナイダーとドナイダーロボ。あれのジェネレーター、念仏スピリチュアル因果サイクロンシステムあれは一定のリズムと振動を一般人に聞かせる事により、それらの魂から出る因果連珠パワー『カーン』を引き出し、それを物体の動力に変換する。

人がこの世に存在する限り、尽きる事無い恒久的なサイクロンシステム。無限のパワー。どこか懐かしい漫画チックな動力源で出来ているこじ付けがましいパワー。でも博士は、そのオカルティックで怪しい力の源にやられ続けてきたのだ。忌々しい事実なのだ。

それが今、やっと克服されようとしている。やっと越えることが出来ようとしている。目には目を。歯に歯を。向こうがそんな科学者らしからぬ怪しい理論を実戦投入してくるのなら、マッド軍曹だつてただじゃおかない――。

松戸博士は、今の今まで悪役^{ヒール}らしからぬほど正統派の科学者として通してきた。

科学者仲間の間でも、

「松戸君は真面目すぎるのさ」

「もっと柔軟にものを考えようよ」

「先人のレコードをなぞっているだけが科学者の役目ではないのじ

やないかね」

と、言われ続けてきた。博士の頭からその言葉は決して離れなかった。

バイタリテイが足りない。独創性がない。奇抜さがない。大胆な発想がない。斬新な趣きがない――。

一見、科学者には必要のない能力のように感じるが、それはあえて致命的な欠落のようにもうかがい知れた。

秀逸なものを量産するのであれば、今までの松戸博士は世界でも指折りの科学者だ。しかし、あの祐天寺博士のような不動の“天才”の称号を得るのには、あの既存の科学とは逸脱していると思われる、暴虐的なほどの斬新な理論が必要であった。奇想天外な理論が不可欠であった。松戸博士には、そこに払拭する事の出来ない幾ばくともつかぬほどの絶大な壁が存在していたのだ。

出撃をさせるたびに負ける。いい所まで“きやつら”を追い込んでいるのに負ける。せつかく一面が茗荷だらけになったにも拘らず、全部むしり取られてしまった挙げ句、負ける。

戦闘員だっていつもボコボコだ。ジャンガラ戦隊は容赦がないから、持っている鐘やバチでここまでやるかってくらい叩きのめしてくる。どっちが正義でどっちが悪なのか分からなくなる時だってある。

あえてそれは目をつむっても、出撃する度、毎度一生懸命茗荷を植えて来てくれている戦闘員の方々が哀れでしょうがない。健気だ。実に健気だ。サド総帥は一体どこでこんな健気で忠実な下僕達しもべを拾って来たのか不思議でしようがなくなるほどだ。

以前、戦闘員との親睦会で飲んだとき、

「オラは茗荷が好きだべさ。大好きだべさ。そこところは博士と同じだべさ。オラは味噌漬けにしてあつつい白飯と一緒に食べるべさ。それが好きでたまんねえ。だから早く茗荷がいっぱい生えた素敵な世界を造るべさ。約束だべさ」

北の大地から選りすぐられた、黒ずくめの覆面男は言った。彼は、

秘密組織「オーラ・ムンド」南関東方面軍第868戦隊の副隊長である。

「うん、約束よ。茗荷帝国が建国された暁には、北海道にいるアンタの家族全員を呼んで、盛大な茗荷パーティーを開きましょうね」

松戸軍曹も、ほのかに顔を赤くし、上機嫌である。

「ウレシイス、博士！ 博士はワシらの希望つす！ 夢だべさ。ただだから、だから……うつつ」

「何、アンタ泣いているの？ 泣く事ないじゃない。まだ建国は先の先よ。これはその一過程。泣くのは建国してからにしないな」

「は、はかせ……。泣いてなんかいませんよ……。ただ、この茗荷の香りがつい新鮮すぎて目に沁みただけで……」

「フツ……はいはい。そう言う事にしといてあげるわ。……頑張りましょうね」

「はいべさ……」

二人はその後、大戦後世代以降には、とんと馴染みのない軍歌というものを、肩を組み合いながら歌ったとか、歌わなかったとか。

しかし、マッド軍曹は、あの時の約束を未だ果たしていない。幾時も過ぎたこの時代でさえ、熱き約束を果たせていない。

約束。あの時の約束――。

名も知らない一戦闘員との約束を、博士は片時も忘れた事などない。先日の戦闘で、茗荷を植えている所を後ろから鈍器のようなもので殴打され、名誉の殉職をした“あの戦闘員”との約束は未だ果たされていない。

「ボクちゃんが至らないばかりに……。どんな詫びをいれても詫びのしようがないわ……」

松戸博士は、彼の墓前で尽きる事のない懺悔の言葉をかけ、尽きる事のない熱い涙を放出した。

その時である――

（博士、悲しまないでほしいべさ。オラはここにはいないべさ。オラは博士の夢と共に行き続けているべさ。だから……）

「——えっ、なに？　今何か聞こえたような……」

鳥が飛んだ。蝉が鳴いた。焼け付くような夏の日差しが、喪服の背中をジリジリと照らしつけた。戦闘員専用に造られた何棟にも及ぶ広い広い霊園の一角で、博士は一人、花束のいじらしい香りを鼻の奥に焼き付けた。

その後、北海道のある家族のもとへ毎年、桐の化粧箱に入った茗荷が届けられるようになった。無論、余談ではあるが。

#12【その いたいけな戦士どもよ】（後書き）

え？

まだ読めますか？

あなたはすごい人だ。

#13【その 優雅なひときは……】

それは長細く、円筒に出来ている。長さ8と1/2インチ、直径3インチ。周りは博士特注のブルーのコンブ製ラバー樹脂で包まれており、その中は何層にも及ぶ特殊コーティングされたレアメタルの鎧がコアを包む。

そのコアは、博士念願の最高傑作！ 神をも超える芸術品。その名も『ミニ原子炉』。

なんとも、なんとも捻りのないその名前である。しかーし！ その『ミニ原子炉』とやら……、かなりの優れものである。

——ミニ原子炉。

そのパワーは、通常の原子炉の127・3倍。分かりやすく言えば、通常の原子炉が127・3個あるのと同じ……？

（聞かないでください……）

あ、うん……、や、その、もっと分かり易く言えば、東。ドーム三万個分？ えっ？ 違う？ う。い棒五千三十二億本分？ 何それ、数字合ってるの？ ていうかそれホントなの？

……なに、ん？ うんうん。どうせ、こんな馬鹿げたもの読んでいる人なんて、ロクにそんな細かい数字期待しちやいないだろうから、適当に、おっきな事言っておけば、雰囲気ぐらい、掴んでくれるだろうって？

……そ、そりゃそうだけどさ——うわっ！ まずいよ、今のみんな読まれちゃったよ……

……というわけで、大体そんな感じです。
えっ？ 何が？

あ、ああ……そうそう、博士の造った《ハイパーアトミックモーター》の動力部分の話ですよ。

とにかく、その『ミニ原子炉』とやらは優れものです。

第一に小さい——持ち運びは勿論、収納にだって便利。ほら、付

属のアダプターを装着して、こうやって折りたたむと、なんと！
フカフカのベッドに早変わり。

そして、こうやって専用のタイヤを付けると、お買い物に便利
なご機嫌な買い物袋にもなっちゃう！ これならいつだって買い物も
可能です。時代は今や、リサイクル。レジ袋だってタダではありま
せんからんね。

そしてここからが本題！ 待ってました！

皆さんは、核分裂に困った事、御座いませんか？

「ウランが近くのスーパーに売っていない！」

「濃縮ウランは、お値段が高いわ……」

「使い終わった放射性物質を埋めるのに、場所がねえ……」

そんな御嘆きの御貴兄に朗報！！

もう、ウランなんて使わなくなっただっていいんです！ 高価な核分
裂をしなくていいんです！ 235だろうが236だろうがな
んだろうが、もう時代はそんな事、厭いといません。これさえあれば、
もういつだって、どこだって、お構い無しに核分裂が出来ちゃうん
です。

その名も、夢のハイパーテクノロジー燃料。『どら焼き！』

これならもう安心。

せっかく植えた、茗荷の絨毯畑を、あのにつくきジャンガラ戦隊
に荒らされる心配なんてもうありません。

せっかく駒沢公園の一带を、芳しい茗荷の楽園にしても、ドナイ
ダーロボに踏みつけられる心配はありません。

この『ミニ原子炉』を携えた《ハイパーアトミックモーター》さ
えあれば、あの忌々しい『念仏スピリチュアル因果サイクロンシス
テム』なんかの嘘っぽいパワーの前に、敗れる事なんてありません。
操作は簡単！

和菓子屋は勿論、コンビニで購入可能などら焼きを《これ》に挿
入するだけ。

すると、あら簡単。『ミニ原子炉』は、一番核反応し易いどら焼

きを超膨大なエネルギーに変換してくれます。ボタンなどの使用は一切無し！

金属粒子並みに埋め込まれた制御装置が自動的に運転を始動。後は口笛を吹いて3秒待っているだけで、ほら！ 貴方の目の前に素敵な未来が待っている事でしよう。

昼夜問わず、くだらない事を考えている貴方に。

最近、お腹まわりを気にしだした貴方に。

行楽のお供に。

夜のお供に……。

「素晴らしいわ！ ボクちゃんの発明ったら」

博士は腕を鞭のようにしならせ、自らを抱きしめる格好で独り、自画自賛を勤しんでいた。

「あら、アンタ？ ボクちゃんの発明が凄いと思わないの？」

えっ？ いや、凄いことは凄いですけど……

「なによ」

え、いや、それって……パクリなんじゃ……？

「あらなによーっ！ ボクちゃんの発明のどこがパクリなのよーっ！ ボクちゃんはマッド軍曹よ！ そんな事するわけないじゃないのよーっ！ もう、最近の日本男児は、すぐイチャモンつけるのよね」

……」

……博士は顔を真っ赤にして作者を怒鳴りつけてきました。非常識ですね。

そして、ホッと後ろにあった本棚に寄りかかると……、一冊の分厚い文庫本程度の書物が落ちてきました。

「あっ……」

博士はその書物を見るや、一瞬氷ついたような冷や汗を吹き出し、布団が猫を覆い被さるように、ワッと倒れこみました。

——や、やっぱり。

その書物。博士が覆い隠したその書物とは、

『大分析！　ぼくらのド。。。もん百科——それがどうしたひみつの章——』

「なによーっ！　アンタだってこの話、パクリばっか使ってるじゃない！」

「な、逆ギレですか？……大体、その主人公のあなたがそれを言うては……」

「なによーっ！　こっちはアンタの体たらくな文章のお陰で、もうテンヤワンヤなんだから！」

「な、体たらく……ですか。解かりました。松戸博士。体たらくは認めましょう。ですが、腐ってもこの作品の“創造主”であるこの作者に、牙を向けましたね。それはあなたの大きいなるミスです。」

「……な、なによ。脅し？」

フフフ。

それは次回のお楽しみって事で。

「い、い、iiiiiiやあー！……」

#14【その けちゃんけちゃんな夢は】

——はぐっ！ はぐっ！……

「ハッ！……ゆ、ゆめ？ 夢だったの？」

博士は、かの研究室の床に、コンニャクのように突っ伏していた。どうやら眠ってしまったていたようだ。よもやだらないお口からは、ダラダラと涎よだれが垂れている。——ホントだらない。

ジュルルル……と、よだれが床一面に、滝のように流る。

「な、なに？ なんなのこの展開。前回の“アレ”は夢だったとでもいうの？……ものすごい悪い夢見だったわ。——それより、酷い作者ね。今どき夢オチを使うなんて。最低ね！」

……………。

未だ作者に話し掛ける、非常識な博士は、辺り構わず見えない誰かとお話しているようだった。妖精さんでもいるのでしょうか？ まるで、駅構内によくおわします“アブナイおぢさん”みたいでちよつと恐いので、少し放っておきましょう。

「フン！ 何が“創造主”よ。このへなちよこ作家め。ド素人め。間合いが甘いつての！ バカとは違うのだよ、バカとは。ボクちゃんみたいな天才に、喧嘩を売ろうつてのは三百万年早いつての！」

しつこい。

非常にしつこいおっさん——松戸博士は、氷のように冷たい床からスツクと立ち上がり、胸元がはだけそうになるくらいふんぞり返ってみせた。いまさら“チョイ悪オヤジ”なんか流行らないのにね。

その時だった——

博士の痩せこけた頬の横を、霞のような、それでいて空気を圧縮したような冷たい風が一筋、空を切り裂くように通り過ぎた。

「ひいふつと！」

それはキレのよい音と共に、堅いコンクリート張りの床に見事に突き刺さった。博士は、予想だにしないその凄まじい風圧に、体を

棒がビリビリ震えるように立ち尽くした。

（アララ……。ちよっこつと、ちびっちゃった）

恥ずかしい。まこと恥ずかしき、かの博士。しかし博士は気を取り直し、その床に刺さったものを確認した。

「な、これは……」

それは正しく、矢文型のボイスレコーダーであった。博士は、矢に携えられた装置を器用にむしり取り、その音声の内容に聞き入った。

『ディア松戸博士。ご機嫌如何かな？ さぞや己の才能の無さに、心を痛め、枕を恥ずかしい液体で濡らしていることだろう。（おもわず赤面……）

さて本題だが、我々は一時間後に、へなちよこ秘密結社「オーラムンド」の基地を全面攻撃する。我らジャンガラ戦隊、そしてドナイダーロボが呐喊せり。キサマらの茗荷帝国の野望はここで潰えるのだ。アハハハハ！ そしてキサマらを倒し、ジャンガラ戦隊が勝利した暁には、竹の子王国を建国するのだ！ 醤油と砂糖で甘辛く煮込んだものを、白米と炊き込んだ筍ご飯。旬の頃、柔らかい穂先を天麩羅で揚げて、塩をちよいと付けてはお張るも至福。海の香りをプンプン匂う採れたての若布とで味付けした若竹煮もオツだ。うゝん、筍最高。茗荷なんか絶滅してしまえ。茗荷滅殺。死して茗荷、拾うもの無し。茗荷なんかクソ食らえ。それにひきかえ筍最高。筍万歳。ジークタケノコ。ハイルタケノコ。欲しがりません茗荷だけは！ 勝たなくても欲しいですタケノコだけは！ ラヴラヴミンキータケノコ、お願い聞いて。ウツフン！ ベーだ。

世紀の大天才大発明家——祐天寺秋嗣より』

「お、おのれえ——祐天寺めえ！」

松戸博士のその顔は、まるで釜茹でにされた悪鬼羅刹のように、

赤く赤く染まっていました。素敵です。一応付け加えておきますけど、博士は照れているのではないのです。怒り心頭に発して、もうブンブン状態なのです。そりゃそうでしょう。こんなおちよくった手紙貰ったら、誰だって怒りますよ。

「否！ 断じて否！ タケノコが、なんぼのもんじゃい！ 神聖で崇高たる芳しき御霊みたま『茗荷』を馬鹿にしくさつてえ……。こうなったら、けちよんけちよんに返り討ちにしてくれるわ！」

けちよんけちよんて……。昭和っぽい……。兎に角博士は、最近聞かないような言葉が流暢に出てきてしまうくらい憤怒を露あらわにしています。ちよつと素敵かも。

それはそうと、これからどうするのでしょうか？ あのマッド軍曹の強敵ライバル、あの茗荷帝国の最悪な天敵、天才祐天寺博士とジャンガラ戦隊ドナイダーたちが、この秘密基地を全面攻撃してくるというのです。

ああ、とうとうこの日がやってきてしまいました。とうとうこんな最悪の日がやってきてしまいました。どうしましょう。どうしましょう。あの祐天寺博士の造った『念仏スピリチュアル因果サイクロンシステム』に、またやられてしまうのでしょうか。また、ぎったんめったんにされてしまうのでしょうか。今度やられたら松戸博士ならず、隊員のみなさんや、サド総帥なんかも一貫の終わりなのです。最後なのです。

「フッフ、心配は無用之助（古っ！）。当たり前前のクランカー（古すぎっ！）。何である、アイデアル（だから、生まれてないっ！の！）。ボクちゃんにおまかせよ。この新作ハイパーアトミックモーターさえあれば、今までのようにはならないわ。——よし、いくわよ！」

松戸博士は、かの『ハイパーアトミックモーター』に、某有名菓子店『。らや』でちよこつと奮発して買って来た、特上どら焼きをセツトしました。

「あ……………」

みるみるうちに、特上どら焼きが吸い込まれて行きます。どんどん

んどんどん吸い込まれて行きます。《ハイパーアトミックモーター
《は、まるで大蛇がウサギを丸のまま飲み込んで行く様に、ぬめり
ぬめりと、その喉を唸らせています。とっても……素敵です。

「さあ、手筈^{てはず}はととのったわ！ それじゃ、《これ》をセツトする
自慢のロボを呼ぶとしますか……」

博士はブツブツと言いながら、右手を鋭く天にかざし、若人が如
く張りのある大声で“それ”を呼びました。

「パイターン、カムヒアッ！！」

#14【その けちゃんけちゃんな夢は】（後書き）

さて。

この作品を、どこかの賞に出そうかな。

「出せるか!」

#15【その 春宵一刻のまどろみの中で】

その響き渡る声——博士の叫び声は、彼の最後の獅子奮迅を飾るに相応しい機体と呼び寄せました。身長57・1メートル、体重550・1トン。巨大な姿で空を駆け、荒れ狂う海原さえにもビクともしないだろう無敵の姿をしていました。

「来たわね！　ボクちゃんの最後にして最高傑作！　その名も『パイターン3』！」

そう、それは正に松戸博士の最高傑作です。その名前がどこかで聞いた風なものではありますが、その容姿もどこかそれを彷彿とさせています。やっぱり松戸博士ですね。パクリは御手の物です。でもそれはちつとも恥ずかしいことではありません。だってやってしまえばこつちのものなんですもの。勝てば官軍。結果オーライ。アントナが大将！　有名になってしまえば何でもあり！　その事は博士がまだ子供時代に経営していた『少年フルーツ*ニュートン』で学んだのです。

——そうよ、そうなのよ。ボクちゃんはこの年になるまで色々学んだわ。一番目の商売では『有名人の名前さえ付け加えさえすれば、○ンコだって売れちゃうんだ』って事をね。あの時ボクちゃんはね、お金がガツポリ儲かった事が嬉しかったんじゃないの。ちよこつと町の人達に名が知れ渡った事が嬉しかったんじゃないの。尊敬する科学者ニュートン博士の名前でリングゴが売れたから嬉しかったんじゃないの。ボクちゃんが本当に嬉しかったのは——人類は皆、愚かな生き物だと知ったから嬉しかったのよ。

ボクちゃんはそれまで、この人類稀に見る“イカした頭脳”のお陰でおいそれと周りの人達とは話が合わなかったのよ。それは血を分けた肉親然り、幼児期を同じくした友達然り、怒涛の飛び級で渡米した時に出会った学友然り。みんなボクちゃんのその“頭脳”の前に分厚い壁を造ってしまっていたのよ。でもね……。あのリングゴ

が見る見る売れていった時感じたの。ああ、なんて人間は素直な生き物なんだろう！　なんて純粋な生き物なんだろうってね。

変に気取ってタキシードを着て沢山買いに来る客もいたわ。

ウイスキーの特用ボトルの空き瓶に小銭一杯貯めて「これで買える？」とか聞いてくるこんなちっちゃな子供もいたわ。

老後の少ない年金で、「冥土の土産」とか言って買いに来るおじいちゃんおばあちゃんの姿もあったわ。

その時ボクちゃんは思った。――人間て皆おんなじなんだ、どんな格好してようが、どんな経緯で育ってこようが、どんなに気張ってしようが、怠けていようが、美人であろうがなかるうが、そんな事関係ないんだって事をね。そう！　人間なんてみんな馬鹿なのよ！　大馬鹿なのよ！　ホント、どうしようもない馬鹿ばかりなのよ！　もう、ホントバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバアア！　地上は馬鹿の巣窟！！　そしてね。このボクちゃんも皆と同じ馬鹿！！　大馬鹿三太郎なのよ！

その時……その時感じた親近感^{へど}ったら嬉しくて嬉しくてもう――反吐^{へど}がでそうだったわ！！

「こんなクズ同然のゴミ虫どもと生まれてきたカテゴリーが同じだなんて何かの間違いだわ！！」

――ってね。

ククク……そうね、それは何かの間違いよね。こんな愚かで、くだらなくて、我がままで、身勝手で……そんな“生き物”として生まれ出て来てしまった“ボクちゃん”は間違いなのよね。――だから……だから……だから！！　あえてアンタ達人類の記憶を抹殺すると心に決めた！　そして宣言した！　だから茗荷なのよ。そう茗荷、あの茗荷なのよ！

ほらよく言うじゃない。

「茗荷を食べると、よく忘れ物をする」

――ってね。

だからこの地上を、この世の中を茗荷で埋め尽くす！　この地球

をこの世の全てを素敵な『茗荷』^{みょうが}で埋め尽くしてしまえば、この全ての人類の記憶が失くせる！——そういう算段だったのよ！——
——ただと祐天寺。アンタはそのボクちゃんの理想を邪魔した。
いいえ！ ことごとく踏みにじったのよ！

ここへ来て知った。この【オーラ・ムンド】に来て解かったわ。
ここに有象無象の雁首揃えただけの様な戦闘員。その戦闘員のみ
なだっておのおのが皆の理想を果たさんが為に頑張っているの。

それを何！？ 一生懸命茗荷を植えている所を、後ろから撲殺！
？ 一所懸命茗荷を栽培している所を、真上から圧殺！？ 酷い！
酷い！ 冗談じゃないわ！ ボクちゃんは人類の記憶を消してしまおうとはしているけど、殺してしまおうなんて言っていない！
殺してなんかもない！——だけど……キサマツ！ 祐天寺
秋嗣、アンタはやった！ 正義とか何とか言っちゃったりして、結局自分の発明や理論が凄いつてとこ見せたくてボクちゃん達……いえ、健気な戦闘員の方々の仄かな夢を踏みにじった、そしてとても良い国だったこの日本の精神をグチャグチャにしまったのよ！——許せない……。許せない。許せないえ。——うおおおおおつ！！ てめえらつ、ぜつてえゆるせねえつ！！

博士の憤懣^{ふんまん}たる怒りの鼓動が、辺り一帯を震わせていた。それは天変地異にも似た神の断末魔のようでもあった。山は裂け、大地はおどろどろしく唸りを上げた。海は荒れ、空が雷鳴と共に豪雨の涙を轟かせていた。

そんな中、マッド軍曹が最終兵器『無敵凡人パイタイン3』が仁王立ちしている。

——『パイタイン3』

それは「塩」「味噌」「醤油」の三位一体から成る『宇宙味付け三大理論』の究極の進化形態であった。イノシン酸、グルタミン酸、コハク酸、グアニル酸等の各種旨み系アミノ酸・核酸が融合進化合体し、その相乗効果によりそれまでの数万倍のパワーを誇る物質に

生まれ変わるといふ偉業を成し遂げている。

ある人は言った――

「ラーメンは、『ブタガラ』『トリガラ』『人柄』」

――だと。

そう、その名言を元に考え出され、あらゆる試行錯誤を繰り返して開発されたのが、この『パイターン3』なのだ。

山野の恵みを存分受け、健康に育った地鶏のガラを丁寧に水洗いし血生臭さを取り、広大な大地で存分に自然の愛をそのボディに蓄えた豚の骨をこれまた丁寧に水洗いし、無農薬の丸のままの野菜などと一緒に鍋で煮込むこと480時間。その宝珠とも侮りがたい究極極まりない液体を、マッド軍曹特有の調合で混合されたレアメタルの粉末で混練する。その後は幾度とも幾度とも叩きつけ、エア抜きを行い、成形をする。それは体力と根気の要る作業。そして最後は摂氏5000度にも及ぶ炉で58時間もかけて焼き上げるのだ。

窯からむせ返るようにして立ち上る芳しき香氣。その至宝の香氣に魅せられて、何百人の“戦闘員”が腹を鳴かせた事か！ ううん！

そんな事知ったこっちゃない。だが、それはある意味“戦闘員”達の魂の叫びでもあった。何故なら、その焼かれているものは、“戦闘員”の給食の予算を削ってまで造られていたものだからだ。

「そうよ！ そうなのよ。この『パイターン3』の装甲は、みんなの夢の塊なのよ。魂の現れなのよ。そんな機体があんな『ドナイダーロボ』なんかに負けるものですか！ いいえ、負けるわけにはいかないのよ！」

気合十二分といった具合のマッド軍曹の瞳は狂った太陽の如き輝きを見せ、いわんや絶滅せんが如き突進して来る祐天寺軍団――ジヤンガラ戦隊へと駆けて行った。

「行くぞおお！！ とうりやあああつ！！」

#16【その 素敵な刀の錆にしてくれる】

雄々しく空を駆るパイターン3。その姿は金銀派手な装飾を身に纏い、しかも夕日を然るべく存分に浴びたような、なんとも奇妙奇天烈、眉目秀麗な“傾奇者”^{かぶきもの}の鎧武者を見ているようである。

「ワハハハハハ！ ボクちゃんたち【オーラ・ムンド】^{がしんしょうたん}が臥薪嘗胆の念、ついに晴らす時がやって来たのよ。祐天寺、いやジャンガラ戦隊ドナイダー軍団。そのあんた達の偽りの正義感などをぶっ潰してやるんだからあ！ 覚悟して頂戴！！ 行くぞ、パイターン・スウォード！」

松戸博士——パイターン3は、腰の辺りから「これは見事な！」
光輝く長刀を抜いた。

これぞ『パイターンソード』。

その硬度はダイヤモンドの127.3倍。そして軟度も非常に優れ、叩いても砕けない性質を備えている。そう、いかに硬い性質を持ったダイヤモンドでも、衝撃には非常に脆い^{もろ}。しかしこのパイターンソードは、それまでの金属の欠点を克服した、前人未到の究極の“刀”^{ソード}なのである。して、その美しく反り返ったフォルムは、柳^や生十兵衛三蔵が愛刀『三池典太』をモチーフにしたマニアック且つ、この世界にたった一つしかない天下無双なものなのである。

マッド軍曹は、それをざつくばらん大上段の構えで振りかぶって見せ、

「この思い、戦闘員^{アイツ}の純真な御魂と共に敵を斬り裂けえ！」

と、寸分のぶれも無い振りで空を斬ってみせた。

「——やあ！」

それは、毎度毎度の特攻のみを想定とした、怒涛の如きうねりを伴った攻撃ではない。刀を振り下ろした後の、何ともいさぎよい心地よさがパイターン3の辺りをうかがう。高度300メートルの上空に聳え立つパイターン3を取り巻く《氣》が、一縷の乱れもなく、

ただ、ただ、佇んでいた。

しかし、しかしかった！！

「ゆ、祐天寺博士！ 大変です。こちらに何のエネルギー反応もなく、凄まじい攻撃がやって来ます！」

祐天寺博士が愛用の母艦『羞花閉月^{しゅうかうへいげつ}』は、混乱した。索敵オペレーターはその慌てぶりと言ったら、それはもうただ事ではない。

「ええい！ 落ち着かんか、このブア力者があ！！ めしの日本語はまるでなつておらぬぞ！」

漢^{おとこ}は腕を組み、凜とした構えで遠くを見つめたまま部下に一喝する。

そう、この男こそ、自らが世紀の大天才と自称する『祐天寺秋嗣』、その人である。

「ええい！ 総員構え——来るぞ！」

その祐天寺博士の掛け声と共に、一瞬であった。

音もない、揺れもない、微かに響く超音波の類いもない。そんな波動が彼らの艦を襲った。それは正に“キレ”としか言いようのない凄まじい攻撃であった。

——『羞花閉月』の左舷の翼が瞬く間に本体と決別し、一筋の間をおいて、艦橋まで轟く爆発音が鳴り響いた。

「うああああ——！！！」

断末魔の如き嘆きの声が、艦橋一杯に広がった。各種配置に就いたジャンガラ軍団の兵たちは皆、初めて出会う恐怖に『三途の河岸』で戸惑う陶酔感を禁じえなかった。

しかし祐天寺博士のみ、天変地異の如き揺れの艦橋にも屈せず、腕を組んだまま——あの『パイターン3』方向を睨み返していた。

「ええい！ やってくれたな、松戸の愚連隊。否、マッド軍曹。敵ながらやるではないか！ まあ良い、それもまた然り！——こうでなくては英雄譚^{えいゆうたん}の最終話を華々しく飾れんというもの。——大人しくその償いを全うするのなら、それも善し！ そちらがあくまで徹

底抗戦を気取るなら、それもまた善し！——ならばあ、我らが義をもって介錯^{かいしゃく}つかまつる。行けい！ ジャンガラ戦隊ドナイダー。ドナイダーロボ発進！！」

#17【その夢の唄にささぐ】

天才！ 祐天寺の目が光った。

それは漢^{おとこ}としての意地、そしてプライド、そして天才としての生き様でもあった。何にも敗北する事ない！ 何にも平伏する事ない！ 何にも侵害される事ない！ 万事これ、我^なの為すものに間違いは無し！！

——それが祐天寺流の人生訓なのである。

「行けよ、我が私兵！ 我が下僕^{しもへ}ども！ 我らに仇なすものを見ん事蹴散らして見せよ！」

「ラジャー！」

祐天寺のその号令と共に、五人のカラフルな若者達が立ち上がった

ドナイダー^{べに}紅

ドナイダー^{ぐんじょう}群青

ドナイダー^{やまぶき}山吹

ドナイダー^{すもも}李

ドナイダービリジアン

彼らはあの『念仏スピリチュアル因果サイクロンシステム』の申し子である『ドナイダーロボRXーゴルゴ38』へと乗り込んでいった。

「アクションー！」

ドナイダー紅の軽快な雄叫びと共に、彼らは奇妙なポーズを取りながらマシンを動かした。

それは一体どんな意味があるのだろう。どんな作用で動くのだろう。などとそんな野暮な詮索は置いて、ドナイダーロボは、そのぎこちなく、無理矢理箱が連結した鈍い動きと共に、マッド軍曹の操る『パイターン3』の元へと飛んで行った。

♪ジャンガラ戦隊ドナイダーオープニングテーマ
『ゆけ！ ジャンガラドリーム』

作詞／やばもとまさゆき 作曲／綿飴耐命 編曲／平和島健
太郎

前奏（鐘と太鼓の鈍調な音） 台詞（念仏念仏ジャンガラだー）

♪腐れ切ったアイツの町に 死人の声が聞こえるよー

紅く染まったTシャツに お前の憎しみ届くときー

みんなの絶望救うのは

群青色の涙だけ （いいえ、そんな事ないわ！）

そうだ！ 山吹の 山吹色の小判が 我らが目の前ザクザク！

そうして李色のネオン街に繰り出せばー

突けずやらせずぼったくりー

嗚呼気分はビリジアン 嗚呼気分はビリジアン

一体その色どんな色

緑でいいんじゃないビリジアンー

行け行け！ ジャンガラ戦隊 ドンと行つたれ！

(二番割愛)

ジャンガラ戦隊の五人の魂は燃え上がっていた。ジャンガラロボのコックピットの中に、今どきレコードプレーヤーがあつたのだ。しかし、コックピットの揺れが酷く、レコードの針が跳びに跳びまくっていた。

「ええい！ こうなつたらアカペラで勝負！」

「ラジャー！！」

五人揃つて二番を唄おうとしたそのときだつた――

五人の目の前に、一瞬にして閃光がはしり抜け、この上ない灼熱の炎が舞い上がった。

「うわああああー！！」

それは目を疑うまでもない、紛^{まが}うかたなき一瞬の光景だつた。

彼らは目映いばかりの光とその膨大な熱で、その姿を、その全てを、息をのむ間もなく蒸発させてしまったのだ。

「見たか、祐天寺。見たかジャンガラドリームに溺れる者達よ。ボクちゃんのこの『パイターン3』は、文字通り無敵なのよ」

マッド軍曹――^{ひだりうちわ}松戸博士は、かのコックピットの中で不敵な笑みを浮かべ、左団扇で麦茶を飲んでいた。

#18【その待ちくたびれた博士ったら】

《 長あゝい空白期間を表現 》

「……ふう。なんかひどく待たされたわね。とつくの昔に麦茶切れちゃったわよ!!」

孤高の天才。松戸博士はもの凄くイライラしていた。

狭いコックピットの中で短い両足を操縦桿そうじゅうかんにのっけちゃったりして、そのまた腕なんかを田舎のたくあんの切っていない状態みたいにだら〜んとさせて椅子に寄りかかっている。もうホント、それはまるでどこかの国の。会保険庁の役人みたいで素敵な仕事っぷりである。

まあ、それは多分、作者に対しての嫌味と受け取って間違いはない。何故ならこの二ヶ月間、この作品は何の手も加えずに放っておかれたからに過ぎないのだとあらためて痛感する。しかし、役人よりは謙虚かな？　なんて思っちゃったりしたりする。

しかしナンセンスだ。それはナンセンスというものだ。これは物語なのだ。ブログとかではない。作者がコミュニケーションをとるなどとは、いかんせん恥ずべき事なのだ。博士ったらそういう作者に對してももの凄くうるさい。

「まったく、戦闘中だったのに長い休憩だったわね。ボクちゃんヤル気ゼロよ。あんたどこほつつき歩いていたの？ 二ヶ月よ、二ヶ月」

そんな事言っただって……。ごめん。

ああ、そうです。そうなのです。作者の僕はこの作品を二ヶ月も放っておいたのです。だから博士はカンカンなのです。

「分かったわ！ もうそれなら一か八かよ。こうなったら『ハイパーアトミックモーター』の出番なんだからあ！！ 行っちゃうわよ、ポチツとな——」

あつ！ ちよつと待つてよ！！ ポチツとな……。つて、どうみてもそれ何かのパクリなんじゃ……。作者の都合考えてよ！！ それまだ早いんだつっの！！

あゝあ……

とうとう作者の劇進行無視で、パイターン3の予備ジェネレーターに、あの末恐ろしい『ハイパーアトミックモーター』がセットされてしまったのでした。

え？ なになに……。ハイパーアトミックモーターてなんだっけだつて？ いやはや……。読者さえ忘れてしまったようですね。無論、こんな作品読んでいる人も希少価値高いですが。

ハイパーアトミックモーターってのはですね、地球上にそれは稀な物質』と。やのどら焼き』を使用して、超効率良い核分裂を起こす大変素晴らしいメカなのです。

えっ？ 何で『どら焼き』が希少価値高かった？

そりやそうでしょ。だってこの星の女性の数と比べて御覧なさいね、どっちが少ないか大体想像がつくでしょう。

え、なに？ そりや詭弁だつて？

うーんもう！ ごちゃごちゃうるさいわねえ。作者ちゃんも怒ったんだからあ！！ 覚悟なさい！！（なぜオカマ口調？）

いいわ、松戸博士、いや、天才博士のマッド軍曹！ いい加減や

「つちやいなさい。読者もろとも地球を木っ端微塵にするのよ!!」
「あら、気が合うわね。もう、作者ちゃんたら気が短いんだからあ。
ウフフ。それじゃ、やっちゃいますか。えいっ!」

博士はそういつて、その装置を作動させた。無論『とら。のどら
焼き』をこれでもかかってくらいどんどん装置の中にくべたのです。
とっても素敵です。

入ってゆく入ってゆく、もうどんどん入ってゆくのです。
ホント気持ち悪いぐらい……。それはまるでずんぐりむっくりの大
蛇が、牛やカバを丸呑みしているように、どんどん入って
ゆくのです。ああもう、金色に光り輝く素敵色の天使が、私達地球
人にこれからもたくさん幸せになつてね、なんて言っているみたい
で、なんだかとってもメランコリックな気分になっちゃいます!!
なーんて……。 (なにが、なーんてだ)

えっ、何ですって? 表現が不適切ですって?

(くっ、こんなところでダメだしとは。一応ホンワカ摩訶不思議少
女ちゃんのマネを試してみたのだが……。これでは。ウーゴに勝てん
! だからナレーション、タッチ交代ね)
(ええーっ!!)

博士はあの素敵色のお友だち……。じゃなかった、えーと、偉大に
して尊大にしてとっても頭が良くつてとっても仲の悪い祐天寺博士
をやっつけちゃうべく、あの末恐ろしいハイパートミクモータ
ーを作動させちゃったのです。

それはもう、ぽっかりふくらんだ焼き立てのパンみたいで、みん
なわくわくしてしまいそうな機械なのです。

「ちょ、ちよつと……。なんだかナレーションに違和感あるんだけど、
しょうがないわね。そ、それじゃ行くわよ! ボクちゃんの大発明
『ハイパートミクモーター』のその威力、とくと見せてあげる
んだからあ!」

松戸博士は、その素敵なロボットさんの無敵凡人パイターン3ハ

イパーモードを操って、とっても頭のいい祐天寺博士目掛けて飛び込んで行ったのです。

#18【その 待ちくたびれた博士ったら】（後書き）

さあ読者諸君。

今回は、いよいよ感動の最終話。

さて、松戸博士ことマッド軍曹には、どんな運命が待ち受けているのでしょうか！

こつご期待！！

「おまえは、江戸川。歩か！？」

#19【その 狂った回転したらへ最終回】

「OH！ ソレデドウナツタノデスーカ？」

オゲル君は、今までの松戸博士の長話を重箱の隅から隅まで舐め尽くす様に聞き入っていました。

「だからあ——」

博士は唇の端っこの方が渴くくらい思い出話を力説しながら、あの『ハイパーアトミックモーター』の危険性を説いていたのですが、
「OH！ ダイジョウブダイジョウブ！ ダイジョウブマイフレンド」

とかなんとか言っちゃったりなんかして、オゲル君は、博士の意見を聞き入れてくれませんでした。

松戸博士はこの数ヶ月間、自らの“あの”大失敗談を語り継いで来ました。

自らの大傑作『ハイパーアトミックモーター』を使ったせいで地球の地軸が目一杯ずれてしまい、元のアメリカ合衆国が南極化してしまった事とか。

そのパワーアップの余力を受けて『パイターンソード』を使用し、うっかり月を真っ二つにしてしまい現在の“二つのお椀”が不規則にグルグル回っているのも自分のせいだとか。

ぼやっとしていてワームホールの出現を許したばかりか、三次元そのものを切り裂いてしまい、昔は存在していなかったような怪しい生物がこの国を席卷してしまっている事だとか。

悲しいかなそのおかげで、この世界に大好きだったあの茗荷の存在自体が消滅してしまっている事とかそんな信じられない話ばかりを——。

「OH！ デモ、ソノオカゲデ、ハカセハ“キヌコサン”トデアウコトガデキマシータ」

だなんて。嬉しい事言っちゃってくれるオゲルちゃんの言葉も甲斐甲斐しい反面、非常に虚しいばかりなのでした。

ですが、その言いようももっともでもありました。このデカ物宇宙人の言う事も満更ではないのです。あの『HAMの悲劇』ハイパーアクトミックスモーターがあつたからこそ、マッド軍曹はいつぱしの幸せを得ることが出来たのでした。そう、なかなかいい事を言っているのです。あのまま茗荷で世界を支配しようとする生活だったら、マッド軍曹こと松戸博士は奇人変人のレッテルを背中にデカデカと張り付けられたまま寂しい人生を送っていたのかもしれないのです。そう、白いギターなんかを掲げながら……

「でもねオゲルちゃん——」

博士は悲しい目をしながらオゲル君を見ました。

「OH！ ハカセ——」

出会うべくして出遭つたのは人の縁。春高樓の花のエン。これも運命なのだ、運命でこうなってしまったのだ、と博士は実感していたのです。だから——

「オゲルちゃん、そのモーター。こっちに渡しなさい」

なんて言っちゃったりなんかしてみたものの、もう無理なのかな？　なんても思ったりしていました。

当然のようにオゲル君は、

「OH！ ダメデス。ワタシハ尊敬シテヤマナイハカセニ、ジブンノハツメイヲミテモラウノデース」

と、『虫歯なくす君《竜一号指令》』を渡そうとしません。

「何言っちゃってるのよ！　それはボクちゃんが造り上げた発明品よ——」

無理だとは分かっているけど、博士のお口からはツバが拡散メガ粒子砲のように勢いよく飛び出しています。ですが、

「OH！　ソレハチガイマース！」

頑という事を聞こうとしないオゲル君であります。

二人の心と心の罅迫り合いも甚だしく、彼らは一向に譲り合う事

をしないのでした。

しかしそれは当然な事なのでしょう。彼らは誇り高き生き物なのです。誇り高き生命なのです。理性と本能の両極端のはざ間を揺れ惑う奇妙奇天烈にして誇れるべき生命体なのです。そう、地球人だからとか異星人だからとかは何ら関係はない。それこそが二人の共通点なのです。

博士は分かっていたのでした。

（来るべき物が来たのね……）

それは覚悟というか、悟りとも言つべきか。博士はオゲル君の心中を察していながら、彼の言い分を質^{ただ}していたのです。

「OH！ ハカセ。コノ『虫歯なくす君《竜一号指令》』ハ、ハカセのツクツタ『ハイパーアトミックモーター』ニ改良ニツグ改良ヲカサネタ傑作ナノーデス。シイテイウノナラ、コレハハカセとワタシノ大合作ナノーデス」

「だ、大合作ですって?!」

「ソウデス、ハカセノツクツタアノ『HAM』デハ、次元ヲキリサクコトハデキテモ虫歯ヲ治療スルコトハデキマセンデシート。ダカラ——」

「だから——?」

「ダカラ、パワーアップサセマシタ。ナント以前ノ百万倍ニ」

「ひ、百万倍!!」

「ソウデス。ソシテエネルギーモ“。らやのどら焼き”デハ効率ガフルイノデ、ドコデモ買エル“ガリ。リ君アイス”ニ変更シターノデス」

「な、なんて事を——!!」

その時の博士の表情つたら、まるでガリ。リ君のソーダ味の色より青ざめていました。分かっちゃいるけど怖い怖い——。だってそんな事は有り得なかったからです。その発明、うっん！ それは“コイツ”の事だから有り得ても、事実上、いえ、科学理論上有り得なかったからです。

「そ、そんな事をしたら——」

博士の全身は恐怖で震え、汗びっしょりになりました。ちよつぴりちびつちゃったりもしました。素敵です。そしてノルアドレナリンが異常大分泌して全身をくまなく席卷しつちゃったりもしていました。もう、こうなればお終しままいです。いくら博士が大天才だからと言っても手の打ち様がありません。

「有り得ない……有り得ないわ!!」

うわごとのように有り得ないを連発し、飛び出ては床にこぼれそうになる瞳を両手で懸命に押さえる博士でしたが、全身という全身があまりにいう事を利かず、いえ、顎の筋肉でさえいう事が利かないお陰で、小さな口もだらしなない洞窟のようにボツカリと開かれたままになってしまいました。そこへ——

「OH! ヤッパリソウデシタ。ハカセ二八虫歯ガイッポンアリマース。マエカラキニナツテイマシータ。C2ノ状態デス、痛ムマエニチャツチャト治シテシマイマショーウ」

なんて余裕しゃくしゃくで迫ってくるオゲル君は恐怖以外の何者でもなかったのです。

その右腕には『虫歯なくす君《竜一号指令》』が握られています。その外野手のグラブよりもでつかい手のひらには、爪楊枝ほどに見えてしまう『虫歯なくす君《竜一号指令》』がつままれていました。

「止よして! お願いだから止して——」

博士の目に映るオゲル君は、いつもよりひと回り大きくて、いつもより迫力のある羅漢仁王像さながらでした。あの、輪島塗りのお椀を真つ二つにしたようなまぶたは、いつもより数段光沢を増していました。あの、エーゲ海のように澄み切った瞳は、ことさら深緑のエメラルドグリーンの輝きを呈していました。あの津波のように揺るぎないオーラは、意外にも“無”を感じさせるほどピンと張り詰めていました。

ハッキリ言って、

「こ、こわい——」

それでも博士は分かっていた。これは愛なんだ。これが彼の慈しみの表れなんだ、と言うことが。

オゲル君の発明（？）は、正に博士の為にありました。博士の虫歯を治してあげよう。博士の痛む姿を見たくないからどうにかしてあげよう。だから、ワタシに出来る事はないだろうか？　ワタシにしてあげることはないのだろうか？　そう考えた挙げ句の諸行なのです。それは博士という大切な人を思いやる愛以外の何物でもない、ひとつのカタチなのでした。そして、その思いやる愛という諸行がこういう形で現れた事を、博士は十二分に理解していたのです。だから博士的には複雑な心境が絡み合っていたのです。

でも——

（絹子以外の人間と心が通い合うのは初めての事だわ……）

許しあえる存在が今——

そう思えるから邪険にも出来ないのも然り、でも、怖いのも然りでした。だって、あのモーターの恐ろしさは当の博士が一番知っているのですから。

「OH！　ハカセ。オゲル行キマース！　アン、デュー、トロワ、スイッチオン——」

今正に『HAM』のスイッチが押されました。そう、慈しみの塊の巨大異星人の手によって——。

——『虫歯なくす君《竜一号指令》』

それは、見た目には電動歯ブラシそのものでした。ですが内容が大きく違いすぎました。パワーアップさせる前でさえ、次元空間に歪みを出してしまうほどの強大な回転と振動があるのです。

その力のご承知の通り、ライバルだった祐天寺博士の存在でさえ歴史から消え失せさせてしまったぐらいなのです。なにせ、今の松戸博士には「そんなヤツもいたような気がする」ぐらいにしか記憶がありません。

あれだけ祐天寺博士を忌み嫌っていたのにですよ。そればかりか、

宇宙全体の量子的構造、時間的位置を大きく逸脱させてしまっています。もちろん、彼らの知る事ではないのですが、そんな途方もない力を有したメカであることは、疑うべくもない事実なのでした。それがパワーアップしたのです。いやと言うぐらい。しかも百万倍に……

それはもう、キ。ガイ（放送禁止用語）沙汰どころの騒ぎではありませんでした。回転は回転を呼び、モーター本体におざなりに取り付けられた歯ブラシは、一秒もしない内に原子分解を引き起こし、肉眼では確認出来ない有様になっていました。

その二秒後には素粒子の類いまで分解され飛び散ってしまい、質量さえ測ることの出来ない有様になっていました。

挙げ句、超対称性粒子とのシンクロ状態も通り越して、他の次元にまで飛び去ってしまい、この世界のものではなくなってしまうした。

その備え付けられていた先端を見るや否や博士は、

「時が見える——」

とまで仰いました。

もう空間は、もう否応なく捻じ曲げられていました。そこに強引なほどに大気が吸い込まれて行きました。そして、そのホールから不思議極まりない夢のようなビジョンが湧き出てきて、天使の歌声のようなうつとりとしたざわめきが聞こえてきました。

と、突然、オゲル君の右腕の中心とした辺りから懐かしい声が聞こえて来ました。

「あなた……あなた……」

博士の頭の中に、微かに聞こえて来る優しい音色。この世のものとも思えない心地の良い音階。不思議とその声は空気を震わせて聞こえて来るような、野暮な感覚ではありませんでした。

「き、絹子——」

回転に回転を重ねるたび、歪みはだんだんと広がって行きます。それがさざなみのような優しいいうねりを呼び、博士の体半分を包み

込んだ時、

「来てくれたのね」

博士は、何かに溶けてゆくような感覚を覚えました。

「OH！ ハカセ、ハカセ——」

なのに、そのメカを持つているオゲル君たら、べつに何事もないかのように博士に歩み寄って行くのでした。もう下半身の殆んどが消えかかっている博士の口に『虫歯なくす君《竜一号作戦》』を優しく差し込もうとしています。

「OH！ ハカセ。ホラ、ドンドン虫歯ガキエテユキマース」

そう、オゲル君の言う通り、今正に虫歯は消滅して行きました。

そう、それは——

この時空間という存在の中から。この温か味を帯びた世界の歴史の中から。この地球という激しい人生の舞台の上から。このネオ・ジャポンという平和の象徴的な国家の中から。この御支^{おっぺけい}平家町という愛すべき人々の住む町の片隅から。

そして、その全宇宙の人々の思いの中から。すべてを加味した彼らの記憶と共に——。

「ご苦労であつた」

オゲル君は、その言葉に何も感じませんでした。強いて言うなら、聞きたくありませんでした。言った相手が誰なのかも理解は出来なかったのですが、敵^{かな}わない相手だと解かっていたので、あえて口ごたえもしませんでした。

オゲル君はまた、宇宙を彷徨^{さまよ}う旅に出かけました。正史というものを取り戻す為に彼の存在があつたからです。いうなれば“そーい

う意識を持っていない” キラー細胞のようなものでした。だからまた、そういうところへ漂い彷徨うだけでした。

「OH！ マッドくんしょー」

オゲル君は、どんなに永い時間を経ても、博士との楽しい思い出を消去出来ませんでした。

《終》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6172b/>

おーい MADぐんしょー

2010年10月8日15時36分発行